



◇令和2年度の学校評価について◇

本年度、1学期と2学期に実施しました生徒・保護者アンケートをもとに学校評価を行いました。また、その結果を、これまでに開催しました学校運営協議会（コミュニティスクール）で検証していただき、本校の教育活動の状況と次年度に向けての対策を検討しました。概要は次のとおりです。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

評価項目	学校運営協議会でのご意見	学校運営協議会の結果を受けた学校の対応
教育課程 学習指導	体験的な活動や問題解決的な学習について、今後も「わかる授業」をめざすとともに、ICT機器の活用にも力を入れること。図書館の活用については、生徒のリクエストをいかして運営にあたること。	ICT機器の活用について推進委員会を立ち上げ、学びの状況に応じた活用の仕方を工夫する。図書館活用については、ビブリオバトルなどの行事を積極的に取り入れる。授業改善に向けて指導と評価の一体化をめざした取組を実施する。
生徒指導	生徒指導に関する啓発に向けた掲示物の充実が図られている。また、有用な関係機関との連携が行われている。不登校やその傾向にある生徒とその保護者の思いを十分にくみ取り、大切に進めること。	報告・連絡・相談の徹底を図る。不登校対策について生徒・保護者の思いに添い、丁寧に進めていく。いじめやいじめの防止や早期発見、早期対応を図る。
人権・同 和教育	「人が困ったら助ける」という意識が伸びていることは人権同和教育の重要性を意識した取組の成果である。今後も普段より意識の高揚をさらに進めていくこと。	これまでの取組を基盤に、教職員が定期的な研修をもとに自らの人権意識を磨き、日々、生徒の自尊感情を育むとともに差別を許さず見逃さない生徒の育成に努める。
特別支援 教育	生徒の特性をいかした取組を継続して行っていくこと。特別支援教育に関する需要が高まってきており、コーディネーターが中心となって総合的な支援を進めていくこと。	支援計画や指導計画について、年度途中で専門家の助言を含めて更新を行っていく。特別支援教育コーディネーターを中心に個々の具体的な支援策等について協議していく。
組織運営	学校ホームページや学校だより、学年だより等で引き続きビジョンを示していくこと。今後も若手教員の育成をはじめ教職員全体の力量のアップに努めること。	今後も本校教育の柱である人権同和教育・生徒指導・特別支援教育を充実させ、OJTの活用により学校組織の機能の強化を図っていく。
保健・安 全管理	コロナ禍で生徒も教職員も健康・安全に対する意識が向上している。地震などタイムリーな事例も取り上げながら日々の危機管理を行っていくこと。通学路の安全に地域とともに努めること。	日頃の危機意識の向上や対応能力の育成に向けて危機管理対策に関する説話や情報提供を行い、火災・地震・不審者等に係る避難訓練を実施し、緊急時の集団行動の方法の習得を図る。
研修	コロナ禍での休校措置等において、例年よりも個別的な研修や自己研鑽の機会を多くもつことができた。今後も学校教育の現状や課題に応じて引き続き適切な研修を実施すること。	学校の教育活動に係る課題とその重点的な取組を明確にして、校内研究主任との連携により有用な研修の実施を図る。また、長期休業中に各自の課題に沿った自己研鑽を進めていく。
保護者・ 地域住民 との連携	コロナ禍で、保護者や地域との子どもを中心にした取組や様々な行事が多々制限され、実施が難しかったが、今後も地域協働合校の理念を大切にしながら結びつきを大切にしていくこと。	学校運営協議会の実施の中で、保護者・地域との連携や共学びの取組を推進していく。情報発信について学校ホームページや学校連絡メールの有効活用、各種たよりや記者提供を積極的に行う。
業務改善	コロナ禍での様々な制限があった中で、教育活動について精選された内容もあった。今後も状況に応じて業務に関する改善が図られるよう努めること。	学校行事や会議の精選等については、特に職員会議の回数減、日報の活用を行っていく。部活動については年度当初に確認した活動時間や休養日の実施を徹底する。

＜ワイヤレスアンプ・マイク寄贈＞

このたび、滋賀銀行の地域社会貢献活動により、校区内の岸本工業様から「子どもたちの学びや成長を応援する物品」としてワイヤレスアンプとマイクを寄贈していただきました。様々な教育活動に活用させていただきます。ありがとうございました。



＜草津市英語ビブリオバトル＞

1月23日（土）に草津市英語ビブリオバトルが開催され、本校から2人の生徒が出場しました。オンライン形式で、自身が推薦する本を英語で丁寧に紹介しました。質問に対しても英語で堂々と答えていました。



＜校内の様々な掲示物＞

本年度の様々な校内掲示物です。皆さんとともに大切にしたいこと、共に考えたいことなどを「可視化」する取組を年間を通じて行いました。

